

## 第2回 水難学会学術総会 一般演題発表 概要

### A1<演題>津波渦巻く体育館 命をまもる着衣泳（東日本大震災における野蒜小学校体育館での出来事）

<発表者> ○安倍 志摩子、安倍 淳（朝日海洋開発）

<概要>

野蒜小学校において2004年から震災前まで7年間実施していた着衣泳の授業。荒天でも体育館で「浮いて救助を待つこと」を学び続けた小学校が、東日本大震災の巨大津波に襲われた。体育館の中に濁流が流入し一気に人々の背丈を越して渦を巻いた。そのとき「着衣泳」は確かにひとびとの命を守った。

### A2<演題>受講者に伝わる「話し方」

<発表者> ○徳永 龍貴、都甲卓樹、小野正彦、末棟健士（豊後高田市消防本部）

<概要>

受講者に伝わる「話し方」として①効果的な習得②普及について発表する。①効果的な習得：1回限りの着衣泳講習会の受講であっても、受講者に「伝わり」、心に残るように「話す」ことで、「浮いてまで」を身につけてもらい、事故減少につながることを目標とする。②普及：良い話し手となれば広がりや繋がりを生み、講習会の再依頼につながる。「わ・か・い・の法則」「相手に伝わる話し方」「大切な事は3回言う」について発表する。

### A3<演題> 紙芝居を使用した着衣泳の説明

<発表者> ○江川照子、安行由美子（関東甲信越地区着衣泳指導員）

<概要>

着衣泳講習の際、実技講習前に「命を守る着衣泳」について口頭で説明するだけでは、受講者のイメージを惹起させにくい。視覚的にオリエンテーションすることで、着衣泳を容易に理解できるようにと紙芝居を作成した。親子着衣泳講習にて使用し、アンケート調査を行った結果、着衣泳の役割を理解できた子どもが多数を占めた。

### A4<演題> 講習の最後に受講者によるチェーンオブサバイバルの寸劇を取り入れること

<発表者> ○安行由美子（関東甲信越地区着衣泳指導員）、星越章吾（市川市消防局）

<概要>

着衣泳講習では、背浮きの技術習得が重視されがちであるが、救命の連鎖を学んだ上で、実技を学ぶことが大切である。実技講習前に「命を守る着衣泳」の概要を説明した後、指導員や教諭によるチェーンオブサバイバルの寸劇を行う事で、受講者に講習の目標をイメージさせることができる。それに加え、講習の最後に受講者にチェーンオブサバイバルの劇を行ってもらうことで、個々の実技の意味を再統合させ、印象づけることができると考えるので紹介する。

### A5<演題> JICA 研修生への着衣泳講習における通訳者の役割

<発表者> ○木村 隆彦（赤穂市消防本部）

<概要>

平成22年度、23年度と、JICA 研修生に対して着衣泳指導を実施した。受講者が全員外国人であるため、使用言語は英語で、通訳を介した解説を行った。通訳者は、22年度は2名、23年度は1名であった。実技講習では、受講者が解説を理解しやすいように通訳者の立ち位置に配慮しながら進行した。本講習における通訳者の役割と重要性を検証し、今後の UITEMATE 講習会の参考としたい。

#### **A6<演題> 溺水予防分野における動画作成の成果**

<発表者> ○小池勝己（新潟県柏崎市消防署）

<概要>

救急医療分野において「防ぎ得る溺水（死）予防」に当水難学会の提唱する「命を守る着衣泳」は、非常に重要である。平成20年から取り組んでいる視覚によるデザイン研究について、平成24年2月に開催された「全国救急隊員シンポジウム」でその試みを発表した。その結果を検証し、さらに可能性を発表する。

#### **B1 <演題> 着衣泳普及に伴う水難救助体制の見直し**

<発表者> ○木村 隆彦（赤穂市消防本部）

<概要>赤穂市消防本部では、水難救助活動を「浮いて待つ者の救助」と位置づけ、潜水による水難者捜索と完全に区別した。「特殊な訓練と装備がなければ水難には対応できない」という思い込みから脱却し、救助を信じて浮いて待つ市民を迅速かつ安全に確保することで、溺水のchain of survivalを確立するためである。その結果、水面救助という用語を定義し、救助隊員だけではなく全職員が安全で迅速な救助を遂行できる体制を構築することになった。本発表では、この取り組みについて報告したい。

#### **B2<演題> 群馬県A市小学校における着衣泳授業の概要**

<発表者> ○田村祐司（東京海洋大学）

<概要>水難学会では全国約2万の小学校における着衣泳授業実施調査を行っている。今回、前橋市の全小学校49校に対して、着衣泳授業実態調査を質問紙法にて行った。調査項目は、過去3年間における各学年別の着衣泳授業実施の有無、実施時期、実施回数、実施時間、実施プログラム内容および着衣泳授業指導上の留意点に関する項目等である。

#### **B3<演題> 筋弛緩と着衣泳の関連について**

<発表者> ○中川達也（和 治療室）

<概要>腕の上げ下げ動作で重力（腕の重み）や浮力を体感する方法を考えた。浮力に関してはプールや風呂で行い、重力に関しては教室内、体育館等で椅子に座り、仰向けに寝た状態で行う事が出来る。それらを体感する事により背浮きの正しい姿勢、有効性の認識に繋がるのではないかと考える。